
保健室の眠り姫

メイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

保健室の眠り姫

【Zマーク】

Z1695S

【作者名】

マイ

【あらすじ】

保健室の一番奥のベッドには、身体の弱い女の子がいつも眠つてゐるんだつて。

”保健室の眠り姫”。そんな意味不明な噂が立つてゐる北守中学校。まだ入学したばかりの病弱な1年生、綺麗な女の子がいつも眠つてゐる。例の眠り姫と同じく1年生で保健委員であるオレがいつ保健室に行つても、眠り姫なんて居なかつた。だけどある日、そいつはそこに居たんだ

：

保健室の眠り姫・登場人物（話が進むにつれ追加されます）

霧島 謎
きりしま めい

性別……女
身長……148cm
体重……42kg
血液型……B型
誕生日……8月12日

北守中学校1年4組12番。 文芸部。 保健委員。

複数の持病があり病弱。 過去に治療で総合病院に長期入院していた。 学校は休みがちで、 保健室の常連。 保健室の1番奥のベッドが定位置。

「保健室の眠り姫」と密かに噂されている。 行動や言動が異常で突然拍子もない変人。

色白で小柄。 ストレートの長い黒髪が日本人形のよう。 小奇麗な顔立ちをしている。

周囲に合わせる事が大の苦手で、 集団行動が嫌いな一匹狼。 クラスでは異端児の部類に入っている。 問題を起こしている訳ではない。

高校生の姉がいるが急け者なので、 謎がしつかりしている。 趣味は小説を書くこと、 特技は料理などの家事全般。

瀬川 香織
せがわ かおり

性別……男
身長……168cm

体重…… 52 kg

血液型…… O型

誕生日…… 4月2日

北守中学校1年5組18番。陸上部。保健委員。

女っぽい名前を幼い頃から密かにコンプレックスに思っている。

運動神経が飛びぬけてよく、スポーツは全般が得意。

伸ばし放題で目が隠れそうな程の黒髪に整った顔立ち。

背が高く脚が長い。細身だけど筋肉質。そんな外見から女子から人気。

だが本人はそういうのが嫌いなので、告白等も受け入れた事がない。口が悪く不器用。素直じゃない。根は優しい。

3つ下の弟がいるので面倒見がいい。

趣味は弟と遊ぶこと、特技は走ること。

さくらい
櫻井 有嘉

性別…… 女

身長…… 158 cm

体重…… 47 kg

血液型…… AB型

北守中学校1年1組14番。吹奏楽部。委員会は無所属。

小学生からの謎の親友。突拍子もない変人の謎に付き合えるのは有嘉のみ。

明るく友達が多く陰口も叩かれない。親しみやすい性格で人気者。少々姉御肌な面もあり、男子でも話しやすい性格。

協調性も大いにあり、謎とは正反対。

内側に癖のついたセミロングの髪と、大きい目の女の子。

身長が高いが、それなりに可愛い雰囲気を持っている。
3つ下の弟があり、香織の弟と同級生。

病弱体质少女の試行錯誤

身体が重い。頭がガンガンと、鼓動に合わせて痛む。胃や腸の中が搔き混ぜられる様な嘔吐感。

幾度となく経験したそれに、私は今も耐える。

幼い頃から身体は弱かつた。

私、霧島謎(きりしまめい)はただの女の子としてこの世に生を受けた人間だった。ただ身体が弱いだけで普通では無いが生きていた。何年か前に重い病にはかかる、入院だの何だの、学校は休みがちだった。病にかかりた当初は命が危なかつた。

人間は誰しもいつかは息絶える日が来る。だけど生まれてから死ぬまでの平均があるとしたら、私の生涯は平均の半分も無い気がした。

少し走れば身体の鼓動が悲鳴を上げる。少し身体を冷やせば熱が上がる。面倒極まりないこの身体の仕組みに、私も私の家族も振り回されていた。今日も私は学校で体調を崩し、今こうして保健室のベッドに連行されてきているのだった。

こんな身体に産んだのは誰？

それは母親だ。だけど母親は悪くない。何故なら、母親だつて娘をこんな弱つちよろい身体に産む予定をスケジュールのメモ欄に書いていた訳では無いし、母親の子宮に導入された最新式アンド イド auの画面の“虚弱体质”という選択肢を私がポチつとやつた訳でもなく、全ては偶然に過ぎないからだ。そして過去には戻れない。一度そうなってしまったものは大概取り返しのつかない訳で、それは十分過ぎる程に分かっている。だから私は何も恨む事はない。泣

いても喚いても嘆いても、その辺の現実はどうにもならないのだ。
大体「何で私をこんな身体に産んだんだよ！？」なんて言われる母
親だって騒音よりい迷惑である。それで母親を責める程、私は子
供でもない。だから私は、ただただその現実を受けとめて、生きて
行くだけ。

そんなことを考へるうち、意識を失つた。

誰かの気配を感じた。

だけど私は眠っている筈で、気配もくそも感じ取る訳無いのだ。
え、何これ。どんな状況？ 私起きてんの寝てんの？ それとも明
晰夢？ 分からない。

気配がある。んじやそれ誰？ 保健室の先生はカーテン開けて様
子みる位の筈。だけど気配はこんなにも近くて様子見つてもんじや
ない。

じゃあ誰？ いつも迎えに来てくれる友達の若葉ちゃん？ だつ
たら私の事を振り起こすと思う。

近くに居て。起こさずにそこに居て。黙つてる。

「……誰…………？」

思つていた事が声になつたらしい。

「え、うわっ！！？」

気配の正体であろう人物が驚いた声を上げた。それで完全に覚醒
したらしい。私は目を開けた。

「……」

あ、眠りに着く前のだるさとかが消えてる。ラッキー。でもまだ
やっぱ本調子じや無いなあ。

最初に視界に入つたのは天井…………、じゃない。誰かの胴体
の部分だ。私が保健室のベッドの横向きに眠つていたから、視界に
入つたのは横で気配を感じていた誰かさんだった。

胴体つて言つたらもげたみたいでむごいけど、実際胴体から上に

私の目がいかないだけで。

「……あー、香織くんだ」

横向きの状態から仰向けになると、その誰かさんの顔までちゃんと視界に映つた。

小学校が一緒だった、隣のクラスの瀬川香織くんだった。あ、断じて”瀬川香織ちゃん”じゃありません。つていうかコレ本人に言つたら多分殺されるよ。

「あ、お、おう……起きたかよ」

腕まくりしたYシャツに紅色のネクタイ、紺色の袖無しのベストに黒いズボン。伸ばしつ放しつぽい黒髪に整つた顔立ちをしている彼は、確かに女子に人気があつた。香織くんは細身で長身だから、私的にはどうも細長いあんちゃんにしか見えない。実際香織くんは足と首が長い。特に足が長いっていうのはかつこいいと思づ。というか香織くん本体かつこいいと思う。ぶっちゃけ言うと彼を見る度にどきがむねむねしている。これ恋かな。うーん、どうだろうねえ。

小学校のクラスで一番背が高かつた、そして今もそうであろう彼の顔を横向きのまま見るのは難しい。こいつ何cmなんだよ。私も香織くんも中学1年生なのに。私はまだ152cmしかない。たしか香織くんは

、いくつだ。

「香織くんって身長何cm?」

僕は仰向けて寝たまま彼の顔を見て尋ねた。

「は? ……168」

「でかつ

「……御前さあ、もつと他に聞く事無いの?」

「え、他かよ」

無理無理分からんよ。私の思考回路どうせ常人と違うんでしょ。

「何でお前ここに居るの、とか」

「あ、それだ! 何で香織くんここに居るの?」

「言われてからじや遅えよ」

「何だよー」

でもマジで何でここに居んのよ香織くんは。

ここは2階で。保健室で。カーテンの中で。ベッドの右脇ですよ。まず保健室の常連つてのが私しか居ないし。この学校。そのせいで入学早々サボり疑惑浮いちやつてるけど。

「何、香織くんも体弱いつけ？　でも陸上部入つてるからそれは無いか。じゃあ何、サボリ？」

「ろくな理由が出てこねーな御前は」

「つて事は他なんだ」

「そうだよ。つーか御前は何でここに居んの？」

「は？　ええ？　それを今更聞いちやうのか」

「だつて知らねーもん。何なの」

「体調悪いの。具体的に述べると嘔吐感、頭痛、倦怠感」

「……へえ」

香織くんはベッドのカーテンをぞつと大きく開け、ベッドのスペースから出て行つた。……は、いいけどカーテン閉めてくれないんだ

「……御前、今何月だよ」

「今？　6月上旬で入学してからぴつたり2カ月ですがそんな事も分からぬのか瀬川香織くん平和ボケ？」

「つるせえ。誰がボケだこの貧弱」

あ、怒つ……いや怒つてないな。ただ反撃してるだけか。つか貧弱言つな。

私はよつこらせと身体を起こし、ベッドに座つた状態になつた。

「まだ入学して2カ月だろ、御前の保健室の利用回数半端ねえよ。何だよこの多さ。トータルで14回とか」

テーブルに座つた香織くんが保健室利用者の名簿を勝手に見ていた。どうせなら椅子に座れよ。

「どんだけ身体弱いの？　御前」

「どんだけってその名簿見りや実感できんでしょ。悪かつたな病弱で。つていうか知つてるでしょ」

「うん。小学校同じだつた時御前かなり休んでた
「だつたら聞かなくても つていうか香織くん何でここに居る
の？」

「保健委員だから」

「あ、マジで？」

「いやその割には僕が保健室来た時居なかつたんですけど」

「うまーくオレが居ない時に御前が来てたんじゃねーの」

「いやそりやねえよ」

変な人だな瀬川香織。私もだけね。

「あのわ、私も保健委員なんだけど」

「は？」

香織くんは目を丸くして私の顔を見た。さつきまで名簿見てたけど。彼がどかつと座つているテーブルと私のいるベッドは、カーテンが無ければ会話は差し支えないらしい。

「え、御前が？ 保健委員？」

「んだよー。」

「いや、だつて御前、これまで委員会に出て無かつたじゃん」「うん出た事無いよ。見事に全部休んだ日と被つてたからね」

「……何それ、どんなだよ……」

香織くんは次はちゃんと椅子に座つた、けどテーブルにぐつたりと持たれてしまった。

「どんなだよつてこんなだよ」

香織くんはカーテンをまたしても乱雑にぎつと閉めた。

「まだ授業終わるまで20分あるから」

カーテンの向こうから香織くんの声。

「まだ寝てる」

やけに響くような低い彼の声がかっこいいな、と思つた。

オレの世界を塗り替えた彼女

『保健室の眠り姫』。

クラスで時折ひそひそと噂されていた。保健室の奥のベッドには女の子が眠ってる。その噂は実話が元で、実際かなり頻繁に保健室を利用してる身体の弱い女の子がいて、その奥のベッドでよく眠つてるって事らしいけど、そのご本人が誰なのかまではオレは知らなかつた。

オレはまだ中学校に入ったばかりの1年で、保健委員になつた。特にこだわつてはない。2学期にやんのは嫌だから初めにやつとうと思つただけだ。だからよく仕事に来てたけど、奥のベッドに例の眠り姫は居なかつた。噂は宛てになんねーんだなつて思つてた。そんな入学して保健委員の仕事にも学校生活にも慣れてきた6月。いつもみみたいにベッド周りの掃除でカーテンを開けたら、居たんだ。

眠り姫が

噂通り、彼女は奥のベッドに眠つていた。
それは霧島謎だった。

謎は小学校が一緒で、親しくは無かつたけど少しは話してた。何だか言動や行動が変で、いや頭がイッちゃつてるつて意味じやないけど、突拍子もない爆弾発言をして変な事を突然やり始める。オレは不思議な人だと思つてた。周りの女子がグループを作つてトイレとかに集団で入つてる中、謎だけがいつも1人で居た。だけど友達が居ない訳では無くて、友達と話しながら笑つてたりするのも見た事がある。何だか中学に入つてからはよく意味もなく校内を散歩し

てた気がする。その変で不思議な性格で彼女は変人として密かに有名だった。

仰向けに眠る彼女の、胸まで伸びた真っ直ぐな髪は結ばれていなかつた。オレの通うこの中学には”肩より下に伸びた長い髪は結ぶ”って校則があつた筈だったけど、謎は大体いつも守っていないらしい。顔が白くて、というか白過ぎて顔色が悪かつた。だけど小奇麗な顔立ちだつた。閉じられた目の睫毛は長くて、何だか目が離せなくなつた。いけないと分かつてたけど、オレは彼女の枕元に立つたまま彼女の顔を凝視していた。

何故か不思議な感覚に囚われた。うまく言えないけどなんか、彼女が人間ではないような気がしてきた。人間以外の何か、違う生き物。未確認生物。不思議で変な謎には、失礼だけど人間つてよりも未確認生物つていう方がしつくりきた。

そして。

「誰

…？」

まじまじと彼女を見つめていると、彼女は目を覚ました。

「えつ、うわつ！…？」

あの時、初めて謎とともに、長く話をした気がする。

謎は思つてたよりも変人で、病弱だつた。保健室の利用回数は断トツで全校のトップで、2ヶ月に14回も来ていた。こいつは週末である金曜か週の始まりの月曜に体調を崩す事が多いらしい。

”うん、委員会出た事無いよ。見事に全部休んだ田と被つてたからね”

道理で保健委員会があるのは月曜だから、委員会に来ない訳だ。

偶然なんかではなかつた。

あれからオレは、何故だかいつでも謎の事を考えるようになった。
授業中も放課後も帰宅中も。謎の顔が、声が、仕草が、頭から離れない。

よくわからない気持ちを抱えたまま。
オレは今日も保健室に足を運ぶ。

視界が曇つてくる。

冷や汗が止まらない。身体に力が入らない。呼吸が浅い。ふらつく……典型的な貧血の症状だ。またか……やっぱ寝坊したからって朝飯食つてないのが駄目なんだな。私のバカ。病弱体質な為にいつも大活躍の薬を入れたポーチを握りしめて先生に事情を言うと、「保健室に行って来なさい」の一言だった。途中で保健の先生に会い、断つてから保健室に行つた。

さつき断つたから、先生はいないが普通に入る。2つあるうちの奥のベッドのカーテンを開けて入り、閉める。薬 i n ポーチ（笑）を枕元に置く。上靴を脱いでベッドに上がり、そのまま横になつて布団を掛け目を閉じた。

つていうかいつも奥のベッドだな、眠んの。

小学校の時も保健室の常連だつたけど、いつも奥のベッドだつた。やつぱり他の生徒が来るかも知れない事を考えると、手前の方のベッドは寝たくない。何せ保健室の眠り姫とか言われる位に常連だから、クラスの皆も私を煙たがつてるんだ。そんな立場で見つかりたくない。小学校の頃も多分、無意識にそう思つてたんだろうな。

「……謎？」

「むえ？」

いきなり隣から声がして、私は間抜けな返事を返した。

「だから、霧島謎だろ、あんた」

どうやら声は隣のベッドからだ。カーテン越しに、低い声。

「That's right!」

「何で英語なんだよ」

突然名前を言い当てられて、それが御名答だつたら英語使いたく

なるでしょ。てか、マジでこの人誰だ。えーと、確か……

「あ。わかった。香織くんだ」

「当たり」

何のクイズだよコレ。

私は仰向けに寝ていた身体を右に向かた。隣のベッドは右にあつた。

「つていうが。どうして私だつて分かんの？」

「保健室ってな、よつほど体調悪いないと普通誰も入つてこないの。なのに普通に入つて来るつてつたら御前だけだろ。あれだろ。御前、特例でいつでも保健室来ていいんだろ？ 身体弱いから」

「え、そうだけど。懃々小学校の保健の先生が中学校の保健の先生に私の病状説明してくれて……つて何で知つてんの」

「誰かから聞いた」

「誰だそいつ。シメンぞ。個人情報を。

このカーテン越しの会話、何か妙だな……

「香織くんもベッドで寝てるの？」

「そう」

「どうしたんだい瀬川さんよ」

「貧血で倒れた」

「あ、同じ同じー」

「ゲツ、マジ？」

「何で嫌がるのよ」

「あ、いや。つつーか、貧血がこんなに辛いと思わなかつた」

「ぼくちゃん慣れちつたよー」

「御前はな。オレは違うんだよ」

「薬いる?」

「は?」

「貧血の薬持つてゐよ。私」

「……んじや貰う」

「じゃ私も飲むー」

私がまだ起き上がりない内に、ベッド周りのカーテンが開いて、香織くんが現れた。

「香織くん起きんの早っ」

「まーな」

「まーなつて……」

それから保健室の椅子に隣同士2人で座つて、テーブルにポーチの中の薬を全部ぶちまけた。

「……かなりあるな、薬」

「えーと。咳止めに鼻炎薬、腹痛薬、頭痛薬、抗生素、便祕薬、貧血薬、ヘルペス、腰痛薬、熱冷まし、あと」

「もういいから貧血薬くれ」

「あ、はい」

鉄分！ つて感じの赤い錠剤を1粒渡す。香織くんはそれを受け取ると、水道まで歩いて行く。

後ろ姿かっこいいな。

「……あ！ 酷いぜ最後まで説明聞いてくれ」

私がいきなり立ち上がりつて香織くんを指差して言つ。香織くんは薬を口に入れようとして寸止め、呆れたようにこいつちを振り返る。

「やだね。授業出れるかもしんねーんだから」

「ええー？ やだあ、香織くん行っちゃうの？ 私つまんないー。寂しい。もうちつとここにいてよ」

「……意味分かんな」

香織くんは水道に向き治つて薬を飲んだ。顔を横にして蛇口からの水を直接口に入れてる訳だけど、なんか不器用なのか知らんがありませんうまく飲めてないみたいだつた。飲んだ後にはもう口の周りがびたびたで、手で「じじ」し拭いながらベッドに戻つてどさつと倒れ込むように横になつた。

「オレ、次の授業までここにいるから」

そう言って布団を頭までかぶる。

「だからそれまで治せ、バカ」

私はぼーっと香織くんの方を見ていた。

「……まだ、ここにいてくれるんだ」

小ちく咳く。聞こえてる筈なのに、香織くんの反応はない。

私が寂しいって言つたから、気を使つてくれたのかな。

そんなはず無いのに、私の心はどうも都合よくしか捉えないみたいで。

胸がきゅうつとなるのが分かつた。

私はベッドに戻つて、布団にもぐつた。何故だか顔が緩んで、自然と笑える。隣に居る彼はどんな顔をしているんだろう。私はどうして笑つてるんだろう。

わかんない。わかんないけど、わたし今、凄く幸せ。

「……ありがとう、香織くん」

複雑怪奇な思考回路

複雑怪奇、拳動不審、分析不能。異常で変で不思議で謎めいた存在。

いつだつてそれが霧島謎だ。

オレは謎の事をよく知らない。

病弱で何年も病院に通つていて、文芸部で小説を書いていて、保健室の常連で… 身長は152?で背の順に並ぶと前から3番目だつた。クラスは4組、ショットチャウフ学校を休んだり保健室に行つたりする為に成績は悪い。つて言つても授業聞いてない割に中の上辺りを保つてゐらしい。あと姉がいる。

知つてるのはそれ位だ。

「あ、香織くんだー」

……至極呑気なこの声はいつ聞いても脱力する。

朝の健康観察ファイルを届ける為保健室を訪れるど、ベッドの上に霧島謎が座つていた。今日も下ろしているストレートの黒髪が季節的に暑そうだが、いつも真っ白で唇だけ赤いこいつの顔はいかにも病弱なので、その暑そうな髪が合つてている。割とこいつの髪は綺麗だ。

謎は、今日は制服のYシャツとネクタイの上に、袖が余る位の長袖の紺色のベストを着ていた。今日は昨夜からの雨がまだ降つてゐる。初夏にしては少し寒いが、校内で服装を変えた奴はまだ見ていない。

オレは保健室のテーブルの上にファイルを置きながら、奥のベッ

ドの方に向かって言つ。

「また居たのかよ。何？ 今日は貧血？ 微熱？ 頭痛？」

「……んーん。腹痛」

無駄にバリエーション豊富だ。

だけど嘘な訳はない。いつもより謎は元気がない。声もか細くなつていてる。

「何で腹いてーの、いつも貧血多いじゃん」

手前のベッドに座つて、奥のベッドにいる謎に向かつて言つた。謎は弱弱しく笑うとベッドに入り、布団を首まで持つてくる。オレの方 つまり右を下にして横向きに寝ると眩く。

「香織くんには分かんないよ」

笑顔で言われるとムカつくな、これ。

「何、変なもんでも食つたの？ それとも冷たいもんの食い過ぎ？」

「それか ……便秘か？ あ、あれだ。昨日腹出し寝たんだわ」

人差し指を向けて言うオレを見て謎は呆れ顔になつた。

「…………ろくなのが出てこないね瀬川香織さんは。そんなんじや女子にモテないぞ」

放つとけ。

具合悪くてもいつものスペシャルにかつちーんとくる嫌味だけは健在だ。

「別モテるとかどうでもいい。いいから教える、何でいてーんだよ」「デリカシーねえなあ香織くんよお…………ちつと無神経だぜ？」

「何でいきなり男言葉になんだよ」

「何となくだよばかやろー」

……やつぱりこいつ意味不明だ。

「で？ 何なの、腹痛い理由」

謎は一瞬顔をしかめ、声のトーンを落とした。

「言つてもいいけど、絶対引かないでよ。いや引くと思ひけど、それをわたしのせいにしないでね」

「めんどくせーな。何なんだよ、言つてみる」

謎は訝しげにオレを見た後に、何でもない事のよつよつと話した。

「……生理痛」

「ほんっ……！」

……ところづ勢いで顔面が爆発しそうになつた。それ位、顔が赤くなるのが自分でも分かつて、オレは自分の顔を手で覆う。恥ずかしいにも程がある。オレは何を聞いていたんだ。謎に。女の子に。「お、おま……っあー！」「めん！ ほんっど」「めん！ 変な事聞いて」「めん！」

必死に謝るオレを遠い目で見ながら謎は目を閉じて、薄く笑つた。
「何照れてんの…… 1時間目、始まるよ。教室行きなよ香織くん」「あ、ああ……」
本当に具合が悪そうな謎を心配する気持ちとか、無神経な事を聞いて恥ずかしい気持ちとか。
複雑な思いを抱えたまま、オレは保健室を後にしてた。

「わたしは、いいでまつてるよ」

そんなか細い声が最後に聞こえた気がした。

「待つわ」

痛い。

これはまずいかも知れない。いつもより、酷い。

「……っ、う」

さつき香織くんが保健室を出て行つてから45分。もう1時間目の授業が始まつて45分つて事だ。

香織くんと話してた時まではまだ大丈夫だったのに。まずい、痛い。お腹が。頭痛も微かにあるし、身体全体が重い。段々と腰も辛くなつてきた。

早退しようかな……

だけど今は家に誰もいないし、自力で帰る力も今はもつ無い。どうしよう……

授業終了まで5分。まずこの時間までは休もう……
あと保健室の先生か誰かに言えればいい。
それまでに痛みは軽くなるかもしないし。

「謎? ……いるか?」

驚いた。

誰かと思つたけど、誰かは分かつていた。この声は、香織くんだ。

「香織くん……」

仰向けに眠つていた私のベッドの横に、香織くんは歩み寄つて来る。深刻つていうか心配そうな、そんな顔をしていた。

「何で、香織くんが……」

「さつき、いつもより酷そうだったじゃん、だから……お前、どんな顔色悪くなつてるよ。早退する?」

「したい、けど……無理。家に、誰もいないの」
香織くんが難しい顔になる。

「自力じゃ帰れない……もう、痛くて、だから」
「分かった。オレがどうにかする」
するとそう言って踵を返し、走って行つた。
「待ってる」

1人残された私は苦しさに悶えつつ、啞然としていた。
香織くん、何をするつもりなんだろう。

半径50cmの世界で君の声が

「帰るぞ、謎！」

約10分後。

走つて保健室に飛び込んできた香織くんがそう言つた。私は驚いて、ベッドに寝かせていた身体を少し起こした。

「え、つ……香織くん、帰るぞ、つて」

「あ、まだそのまま寝てる。オレお前の鞄持つてくれるから」

そう言ってまた保健室を出て行く。

……いや、帰るぞ、つて？

文字通り、香織くんは私の鞄を持ってきた。そして弱弱しく立ち上がつた私を下駄箱まで連れて行く。

「ほら、靴」

私の下駄箱から茶色のローファーを取り、私の足元に投げる。私はお礼を言つて上靴からローファーに履き替えた。香織くんは私の脱いだ上靴を私の下駄箱に入れると、自分の黒いスニーカーに履き替えた。

え、どうして香織くんも靴履くの？

香織くんは私の鞄を持ったまま言つた。

「送つてくから。ほら、乗れ」

そして私の前に背を向けて屈む。

「……はい？　まさか、背中に乗れって……？」

「うつせ仕方ねーだろ！　お前家遠いんだろ、歩けんのか？」

無理です。

お腹痛いし腰も痛いし微かに頭痛もあるし。身体が鉛みたいに重いです。

「先生とかに言つたら、親が迎えに来れないなら普通先生が送るん

だつてな。けど今テスト前で先生忙しいだろ、だから

……だから香織くんが送つてくれるんだ。

嬉しいけど恥ずかしい。いやだつておぶるつて何歳以来ですか、もつ……

「」が地方の田舎で、しかも平日の午前中で、人通り皆無なのは幸いだと思う。

「……ねえ、香織くん。重くない……？」

「さつきからそればつかじやねーかよ。重くねーっつてんだろ」「だつて気になるじやん。

香織くんは乙女心が解らないのか。

わたしは今香織くんにおぶつてもらつて、家までの道のりを歩いて（？）こる。「レほんと恥ずかしい。とんだ羞恥プレイだ。人いないうからいいけど

香織くんに歩いてもらつての歩道の横は、殆ど森みたいに木が生い茂つてる。狭い車道もビビが入つてて、やつぱりここは田舎だ。商店街も鄙びいた感じだし。そういう街の雰囲気が、わたしは好きなんだけど

「寧ろ全然重みなくてなんかぬいぐるみでも担いでる気分なんだけど。お前さ、体重kg?」

「……聞くの？ それ。42kgだけど」

「ほらな、軽いじゃん。オレ52だから10kg違い」

「香織くんは……身長高いからよ、168cmでしょ」

「お前ちつせーよな、152とか」

香織くんの背中つて広い。細いから、狭そうだなつて思つてたんだけど。やっぱ男の子は違うんだなあ。

「……ねえ、あのさ」

香織くんに向かつて言つもの、顔がよく見えないのが盲点だ、おんぶつて。

「何

いつもそつけない返事は相変わらずで、わたしはなんか笑えてくる。

「香織くんって、かっこによね

「はあ！？」

驚いてるであらう香織くんの声が頭に響く。頭痛が……
「ちょ、香織くん……頭に響くよ。痛い」

「あ、『め……つてこや、お前が悪いだろ。いきなり変な事四つから

「ら

「だつて……そつただけだもん」

そう言つて、香織くんの肩に頭を乗せる。あつたかい。いつもれば少しさ、具合が落ち着く気がする。いつして香織くんの背中にくっつくと、改めて彼が男の子なんだなって思つ。背中が硬い筋肉質つて言つのかな。引き締まってる感じが、全身を通じて伝わる。

照れてまたでっかい声出して飛び退くかも思つてたけど、わたしが頭をくっつけても香織くんは黙つていた。

「……あつたかいなあ……」

空氣みたいな小さい声でそつ咳く。

「何、寒いの？」

「そつじやないよ。香織くんは分かつてないなあ……」

誰だつて女の子は、できるだけ男の子の傍にくつついでいたって思つでしょ。

「お前はほんと弱つちーな。病弱。バーカ」

「何それ……今更言つ事じや、ないよ」

「だつてめつちや軽いし。食つてんの？」

「……食つ過ぎもつて位に食べてるよ。これでもわたし大食いなんだよ~？」

「オレはそこまで言つ程食つてねえけど、陸上やつてんの」

「うー」

香織くんの首に回した腕を、ぎゅっと握つた。
何だかやるせなくなつて、わたしは黙つた。
暫くすると香織くんが口を開いた。

「どうかした？」

「この声が好きだなつて、改めて思う。
この好きな声が間近で聴ける今なら。
隠してた本音が言えるかもしれない。」

「……ねえ、香織くん、」

色づき始めた少女の小さな世界

やつと漏れたような謎の声は、やけに低く重くて。

「何？ どうかしたの？」

そう繰り返し尋ねてくる俺の声も、少し不安そうな色が混じつて
いると、自分で思った。

謎がこれから何を言おうとしているのか、それがオレには分からな
くて。どうしたんだろ？ そりやあ具合がいつもより悪くて、こい
つは元気が無い。だけどそれでもなんか、違うんだ。

「言いたい事あるなら言えよ。何？ 別に気とか使わなくていいけ
ど。何なの？」

そう言つと、謎は俺の背中に埋めていた顔を更にぎゅうっと押し
つけた。背中全体に伝わる体温とか、背中に当たつてる胸とか、そ
ういうのが気になつて俺は何だかさつきから落ち着かない。てかお
ぶつてるつていうより、こいつオレに抱きついてるだり……
するとそんな俺の気持ちをもつと搔き乱すようなことを謎は言つ
た。

「わたし、このままで居る事に不満はないの」

意味が全く理解できなかつた。

「は？ どうこう事？ このままで……」

やっぱこいつはどこまでも異常で、変人なんだ。
謎、凡人のオレにはお前の考える事は難し過ぎる。

だけど謎はお構いなしに言葉を紡いでいく。

「別にね、身体が弱くたつて……いいんだよ、わたし。負い目を感じてる訳じゃないから」

「……けどお前の言い方、何かどつかに未練残してるよ」

そう言つと謎ははつ、と鼻で笑つた。

初対面でやられたら確實嫌われるであろう、謎の悪癖だ。実際鼻

で笑い飛ばすつもりはないみたいなんだけだ。

「無かつたら、今更こんな話切り出さないけど」

「で？ 何。言いたい事はつきり言え。意味不明でも、俺は聞くよ
謎が黙る。

何をそんな内に秘めてるんだ。

苦しみ？ 哀しみ？ 怒り？ 恨み？ 姦み？

「ずっと寂しかったんだよ、わたし」

子供みたいな言い分だった。

その割に声は大人っぽくて、何だかアンバランス。

「みんなわたしの事おいていくよ。

わたしがベッドで苦しんでる間に、みんなどんどん大きくなつて
いつてる、肉体的に。

それなのに気持ちだけはわたしの方が大人で、誰に何言つたつて
分かつてもらえるはずもない。

みんなと同じように身体動かしたいって訳じやない。

だつて病弱に生まれたんだから、仕方ないじやん。

だけどやっぱり、みんなと同じじゃなくたつて……思い切り走つ
てみたいし、動きたい。

わたし、文芸部だけど、もし身体が丈夫だつたら陸上部入つて
みたかったんだ。

バスケとかはルールがまどろっこしくて苦手で。

ただひたすら走つてみたいなあ ……つて……。

別に今の生活に不満はないよ。小説書くの好きだし。

わたし昔から両親は仕事で家に居ないから、家事とかやってて。

そういうの結構楽しいんだ。

わたしみたいに持病が何個もあつたってできぬ」ひ、こいつぱいあるの。

だけどなんか……憧れちゃうんだ

初めてこんな事を聞いた。

陸上部に入りたかったのか。

両親は昔から仕事で家を開けていたのか。

毎日家事に追われていたのか。

持病つて、1つだけじやなかつたんだ。

俺は何かできないんだろうか。

俺は陸上部に入つてるし、
両親は遅くまでは働いてない。
家事にも追われてないし、
持病なんてない。

「……ならそ、俺が相手してやるよ」

「…………どうこう、こと」

謎の驚いた声なんてレアだな。そんな事を思いながら皿薬を続ける。

「毎日に何か足りないなら、俺が相手になるよ。病弱で外出れないんなら俺があ前んとこ行くし、何だつてしてやる。少しあかわんじやねーの?」

そう言つて後ろを振り向いて、俺は笑つた。

俺の背中に顔を埋めて、少しだけ顔を上げた謎の目が見えた。
迷子になつて、母親に見つけてもらえた子供みたいな。
そんな目だつた。

「俺はいつもお前の。よくねーか?」この取引

何だつてできる気がした。

この、綺麗で意味不明で、理解不能でビックリするもなく淡くて弱い、変人が。

何故か急に愛おしく感じて。

俺はただ守りたかったんだ。謎を。

俺が前に向き直つても、暫く謎は黙つていたけど。
唐突に謎が細い声を出した。

「……ほんと?」

俺はくくく、と笑つた。

「こんなところで嘘ついてどーすんの、オレ」

「いつでもいいんだよね？ 寂しかつたら呼ぶから来てね？ 学校

休んだら帰りでいいから、お見舞いきてよ？」

そう細い声で聞いてくる謎は、何だか子供みたいで。案外普通の
女の子だった。や、変人なのは変わりないけど。

「いいよ別に。いつだって飛んでつてやるよ。あ、けどメアド教え
ろよ。飛んでくに飛んできねーから」

そんな俺に謎は微かに笑つた。一瞬振り返ると、そんな顔が見え
た。

「うふ……ありがと」

彼女が顔を埋めている俺の背中が、暖かく濡れた気がした。

GIRLS × TALK!!

「あつメイ、部屋のカーテン変えた？ かわいー」

7月23日土曜日、午後2時15分。

夏休みに入つて数日が経つた。わたしは自分の部屋に、親友の櫻井有嘉くらいありかを呼んでいた。

有嘉は同じ小学校出身で、小学2年生の頃からの付き合いの親友だ。進んだのも同じ北守中学校で、クラスは違う1年1組。わたしとは正反対で、明るくて友達も多く、陰口なんて滅多に叩かれない人気者だ。ちょっとサバサバしたとこもあって、男子でも普通に話せるし。そんな子がどうしてわたしの親友になつたのか、わたしは今でも分からないままなんだけれど。ちょっと内側に癖のついた髪とか、大きい目とか、割と高い身長とか、甘くて可愛い高いソプラノの声とか、全然違う。わたしはストレートの黒髪だし、目が鋭いし、身長はクラスで前から3番目で、澄んでるけど冷静な低いアルトの声をしている。

いつも行つてるお気に入りのケーキ屋で、ガトーショコラとチーズケーキを買つて。わたしの部屋のテーブルを向かい合わせに座つて話している。吹奏楽部の有嘉は登校日とか土日でも練習がいつもある。夏休み中もほぼ毎日練習があつて、中学校に入つてからこうして長く話すのは久し振り。話題になるのはやつぱり恋の話だった。

「でね、メアドも交換してそれから時々メールくるの！ それでメールで”ありか”って名前で呼んでくれたんだよ！」

有嘉は中学校に入つてから、同じ1組の男の子に恋をしたみたい

だつた。名前は大東俊^{だいとうじゅん}。割と……いやかなりモテるらしい。身長はそんなに高くなくて（いやわたしよりは勿論デカいけど）、女子で背の高い有嘉のちょっと上くらいだった。顔立ちもまあ整ってる、と思つ……わたしのタイプじゃないけど。

ガトーショーフトのチョコクリームをフォークの先端でつつきながらぼーっとしていると、不意に有嘉が身を乗り出してくれた。

「ねえっ！ メイは好きな人いないの？」

わたしはフォークをくわえて、「うー」と唸つた。

「……むー、うー、あうー……、仲良くなつた男の子なら、いるけど」

「誰誰？ 4組の人？？ 教えてよ」

こきなり食いついてきた有嘉にWa o!! と驚きつつ、わたしはお気に入りのクマのぬいぐるみ（にゅにゅつて名前なんだよ！）を弄びながら言つた。

「香織くんだよ、瀬川香織くん」

「ああー！ 瀬川か。え、何？ なんかなれそめっぽいのないの？」
「な、なれそめって……付き合つてもないのに、言い方おかしいじゃない。うん、でも……あるよ、仲良くなつたきつかけみたいのは」

は

「どんなのどんなの？？」

女子って本当にうつ語好きだよね。よくそんな目をLED電球の如く輝かせてじつちを見るよ。他人の恋のなんつーかそのアレがそんな楽しいか？

……とまで言つちゃうと有嘉がやばいので、わたしは眉ぞりとか睫毛も動かさずにスルーした。

「わたし、身体弱いじゃない？ で、よく保健室の奥のベッドで眠つてるんだけど……、香織くん、保健委員だったみたいで。わたしも保健委員だけど、休んでて委員会出た事なくて知らないで。

で、ある日眠つて、起きたら枕元に立つてたの。それで、だんだん保健室でいっぱい話すようになったんだ」「

「ヤーヤーしてゐる有嘉に呆れつつ、わたしあはこゆこゆの顔をみよ
ん、と引つ張つたりしながら続けた。

「それではまたある日なんだけど、生理痛がものすごく酷くて。時間目の授業はパスしたんだけど、おさまる気配がなかつたの。そしたら香織くん、先生に言って早退できるように手配してくれて。だけどわたしの家誰もいなかつたから迎えがこなくて

香織

お手て蒙て送てくれかんた

!! せいかくは三頬に三瓣をもつて!!

יונתן

わたしの話が終わると同時に絶叫した有嘉の頭を叩いて、わたしは話を続ける。

「それでその時、おぶられながら言つたんだ。身体弱いのがちよつと悔しかつたつていうが、なんか溜まつてたみたいなのを香織くんに言つたの。そしたら……」

わたしは唇を噛んで、俯いた。

ちよーと顔が赤くなる

「毎日に何か足りないなら、俺が相手になるよ。病弱で外出れないんなら俺がお前んとこ行くし、何だつてしてやる。少しはかわんじゃねーの？」って。『俺はいつでもお前の。よくねーか？』この

「ちょっと笑つて言つたら、有嘉は顔を手で覆つて、きやーとかわ
ーとか叫んで、落ち着いてから言つた。

取引 つ て

「いいじゃんそれ、もうカレカノになれば？」瀬川、絶対メイのこ^{二子者}だ！ あこし恋^{ハシ}してあるからぬ！

「いや待つてよ……あの、まだ何も確率して

「いや待つでよ……あの、まだ何も確率してなしの、有嘉勝手に進めないでよ」

「だつて相思相愛じやない？　おめでとうメイ、あたし親友として祝福するよ！　あーもう幸せそう過ぎつ」

「有嘉、何なのそのノリ。だから女つて厄介なんだよ」

「メイも女じやん。つていうかさ、瀬川とメールとかしてんの？　あいつ携帯持つてんじやん」

「あ、夏休みに入つてから結構してるよ……ほら、俺が相手になるつて言ったから、何かあつたらいつでも連絡しろつて言われたからすると有嘉は徐にケーキの皿の横にあつたわたしの青い携帯電話を開き、いじり始めた。

「ちよつと有嘉さんやめて頂けませんそういうの……」

奪おうとするも有嘉は立つて部屋をうろつき、わたしから逃げやがつた。わたしが手をの伸ばしてもダメだ。何せ女子で長身の有嘉とクラスで3番目のわたしとじや身長差が10㌢くらいある。

「あつ、”最近風邪ひいてるみたいだけ大丈夫か？”だつて～！」

メイのクラスの健康観察簿毎日チェックしてんじやないの瀬川

「おい有嘉、大概にしろ、そろそろキレるぞ」

「あーっ！」熱出すとかバカだろ。薬飲んで寝ろよ”だつて

この前に3日間休んで寝込んだ時のじやん！　わたしが心配してメールするといつも返信すぐ来たのに2時間後に返信きたのつて瀬川とメールしてたから？　ほらやつぱラブラブじやーん

「あ、やめて有嘉さんすいませんもう読み上げないで……？」

10分後。

受信ボックスのメインフォルダのほぼ全ての香織くんからのメールを見て、有嘉はやつとわたしに携帯電話を返した。わたしは仕返しのつもりで有嘉のピンクの丸っこい携帯電話を奪つて、大東俊からのメールを朗読してみたものの、有嘉は恥ずかしがるどころかデレデレしながら「ね、かつこいいでしょー！」とか言つからつまんなくなつて携帯を返した。

「有嘉最低……あなたの家計を8代末までネギが刻めなくなるよ」
に呪つてやる」

「知らないよ！ 何その地味な呪い。つていうかさつきからにゅに
ゅの顔ひつぱつたりもんだりすんのやめなつて、可哀相だよ
」

「うー…」

今度はにゅにゅの耳を引っ張つてみた。引っ張られたせいで目が
つりあがつただけだった。にゅにゅがあんまかわいくなくなつたか
らやめた。

有嘉はそんなわたしを見て話を切り出す。

「ていうかさ、メイはぶっちゃけ瀬川のことどう思つてんの？」

わたしは有嘉の顔を見た。珍しく真剣な表情をしていた。

「…………嫌いじゃないよ、寧ろ好き？ だと思つけど……優しい人だ
つて思つよ。そつけないし口は悪いけど、すぐ赤くなつたりすると
ことか可愛いし、不器用なだけで、わたしに優しくしてくれるから
も、」もじと口こするわたしに、有嘉はにつと笑つて言つた。

「じゃ、がんば……応援してるから」

それはどういふ意味を持つてる言葉なんだろう。

ひとりでに過ぐる夏休み

「……夏休みだ」

暇だなあ。

香織くんは陸上部の練習で、有嘉は吹奏楽部の練習で。他の友達も部活が忙しい。わたしの入ってる文芸部と言えば、小説を書いて部誌に載せてるだけだから夏休み中の活動は無い。

わたしは自室にて、爺ちゃんにねだつて買ってもらえたかなーりハイテクっぽいクーラーを操作して26度に設定する。リモコンをテーブルに置いて溜め息を吐いた。

香織くんとか有嘉とか忙しい人には悪いけど、こつして暇すぎんのも何か、どうなんだろ。こういう思いしてる人、きっと北守中で数人しかいない。北守中は部活動が盛んだから、どの部も忙しい。暇なのは文芸部だけだ。実際、所属部員数も北守中で一番少ない。部活動が成立するギリッギリの5人。3年生が2人、2年生は無し、1年生が3人。

そんな時だつた。

ピーンポン。

自宅のチャイムが鳴った。

いつもは婆ちゃんが出るけど、最近耳が遠いのか気付かず出ない事がある。今回はそういうあれだつたらしく、わたしは部屋を出て階段を駆け降りた。わたしの家は築25年目だから、カメラとか話せるアレとかがついてるインターホンじゃない。

「うえーいっす。誰すか

WAO!

「ども、謎。謎の携帯番号失くしたからさ、断らないで来ちゃつた」

「メイちゃん久しぶりー！　あたしも来たんだけどいい？」

同じ文芸部1年の2人、屋久吉博やひきよしひと古野雪花ふるのせつかであった。

いやー、昨日部屋片付けたんだよね。あー良かつた良かつた。

2人を部屋に通す。吉博くんと雪花さんはわたしに借りた本を返しに来たらしい。

「ねえねえ、この前吉博くんに借りたのっていくらで売ってる?

面白かつたから欲しいんだけど」

「あー700円くらいだったかな。てか謎さ、俺に借りてばっかだけど自分で買わないの?」

「買つてるつてば。雪花さんがハマつてるのは大体持つてる」

「あーそういうやメイちゃんに借りたのあれほんと感動した!」

「でしょ。あれは何て言つかね、人生変わる」

「何それ、俺にも貸してよ。どれ?」

「あーあのね、この文庫のだけど……」

吉博くんも雪花さんも、同じ小学校で同級生だつた。

今吉博くんは1組。香織くん程ではないけど背が高くて、銀縁の眼鏡をかけてる。髪の毛はぱりぱりと切つてあって、香織くんとは大違ひだ。外見は何か……ザ・文学少年つて感じだ。実際性格も真面目で融通が利かないし堅物だし。基本的に突つ込みに回る。いつも可哀相な役目になるタイプ。

雪花さんは3組だ。センター分けの髪を肩位まで伸ばして、校則に則つて1つに後ろで束ねている。こちらも長身で、有嘉を超すべり高い。っていうか香織くんも有嘉も吉博くんも雪花さんも、どうしてわたしの周囲には背が高い奴しか居ないのかね……まあそれはそうとして。雪花さんは何て言つか、強かでちやつかりした性格だ。事勿れ主義で、まあ雪花さんの近くに居れば平和な気がする……穏やかなんだよな!

部屋の中央にあるテーブルにそれぞれ座り、持参した本を取り出す。

「つかさ、ほんと謎んちつて本いっぱいあるよね

吉博くんは振り返り、わたしの本棚を眺めて言つた。わたしの部屋は西側に本棚が2個置いてあつて、その全面が小説と漫画で埋め尽くされている。てか本棚に収まんなくなつて、棚の上とかに積んであつたりするなんだけど。そろそろ売つたり捨てたりしないと駄目かな。

「わたしは身体の半分が原稿で出来てるからね、ハハン」

「いや意味分かんないんだけど。何かそのハハンってムカつく

「よく言われます」

「吉博は夢無さ過ぎ！だからコーモアなくて部誌の小説も人気出ないんじゃないの？」

「ほつといてよ！ 雪花も謎も堅物堅物つて何なの！？」

「あ、キレた。うへへー。わたしも雪花さんも堅物なんて一言も言つてないのになー」

「吉博自意識過剰なんじゃないの？ あははつ」「

「……」

主にわたしと雪花さんは吉博くんをいじつてるだけな気がする。あとは小説の貸し借りと、部活での執筆活動とお互いのアドバイス。それ以外にもまたわいな話とかいっぱいするけど。部室で。

「つていうかメイちゃん！ 何かこの前さ、涼樹^{すずき}が”もう終わりにするから。お前の事諦めるから”とか言いだしたの。勝手に始めといて勝手に終わらすとか意味分かんない？ あたしの意思とか全然聞いてこないし」

「あーはいはい……」

涼樹つていうのは、フルネームで中村涼樹^{なかむらすずき}。これまた同じ小学校

の同級生で、今は2組だつた。いかにもスポーツ！ つて感じの短い髪に日焼けした肌。実際野球やつてて運動神経いいんだけど。いつも周りに合わせてアホみたいに騒いでるけど、本当はかなりクールで大人っぽい。そんな涼樹が好きになつたのは雪花さんで、その気持ちがクラスの男子にバレて、勿論雪花さん本人にも伝わつて行き。それ以来気まずいのだ。雪花さん本人は涼樹は結構タイプだか

ら付き合つてもいいと考へてるのに。

吉博くんはレンズの奥の細い田を更に細め、考へてから呟いた。
「涼樹つてさ、奥手だよね」

「あんたが言うか超絶堅物奥手ヤロー」

「はー? 俺は奥手……だけどちらんと話すもん! 好きな娘と」

「あーだけど吉博はザ・奥手だよねメイちゃん」

「そつすよね、雪花さん。まー涼樹も涼樹だけ……」

「あ、吉博は優子ちゃんどどうなの?」

「えつ? いや、どうつて……普通、だけど」

優子ちゃんつてこののは吉博くんが好きな娘。わたしはあんま話さない(てか女子とあんま話さない)けど。有嘉と同じ吹奏楽部の娘だったな。

「何かさつきから、本の話から恋愛の話になつたね」

雪花さんがわたしの用意した菓子に手を付けながら呟つ。吉博くんはアツプルジューを一口飲むと、呆れ顔になつて呟つた。

「元はと言えば、雪花が涼樹の話し始めたのが悪いんじやん」

「いーじゅん別に! っていうかメイちゃんは? 最近瀬川くんと仲良くない?」

あーやっぱ来ましたかそういう振り……

「そりゃあ同じ小学校であれば大概話せるし」

「へえー、瀬川と仲いいんだ」

「同じ委員会だからね。つていつか香織くんの事、ほとんどの人が名字で呼ぶんだね」

「あー確かに。瀬川つて珍しくないけど、同じ名字の入学年にも居ないから」

下の名前忘れ去られてるんじゃないだらうな。

「ていうか瀬川香織つて名前や、字面的には綺麗だけど男にはあんま合わなくない?」

わーわー。それ言っちゃ駄目じゃないか。香織くんが一番気にしてんだぞ。

「そんな事なによ。あたしはあの名前、瀬川くんには似合つてると思つけど? ね、メイちゃん」

「わたしも同感。香織くんは香織くんじやないと香織くんじやないでしょ」

「……謎、何言つてるか全然分かんないけど」

時間がきて、吉博くんと雪花さんが帰つて。
わたしは静かになつた部屋で一人、物思いに耽る。

香織くん。夏休みに入つてメールも電話もしてないし、勿論会つてもない。もう2週間にもなる。

香織くんの声が聞きたいな。香織くんの笑顔が見たい。久しぶりに話して、一緒に笑いたい。

香織くんに、会いたい

：

会いたいなあ

。

そんなどつかのベタな少女漫画のよつな、瞳がキラリーン！ つて感じの恋に恋して夢を見るヒロインのような事を闇雲に考え、一晩中よく眠れなかつたわたしは、案の定寝不足の悲惨な顔で後日登校する事になつてしまつた。

何で夏休みの癖に学校あんだよ、と言つとまあ、ほらアレだ。保健委員の仕事だよ。北守中は夏休み前の大掃除がない。職員や事務員、その他諸々の大人の方々がやつて下さつてるらしいが、どうも保健室だけは例外……というか養護教諭が忙しいだけなんだけど。昨夜電話があつて、まあ掃除に来いと。そういう事だ。わたしはいつも委員会に出てないからわたしが抜擢された（されなくてもいいのに）。

という訳で午後3時。わたしは北守中学校に到着した。

夏休みと言えどれつきとした学校な訳で、わたしは暑い中制服で学校内に入った。うーん、まあ野球部員が走り回つてるグラウンドよりは3倍くらい涼しい気がする。うん。結構暑くもないじやん。ふふん。

保健室の掃除くらい1年女子一人でもできるつしょー、という養護教諭の考えに東京ドーム並みにデカい殺意を覚えながら、保健室に辿り着く。

「……あー、うん。普通だ」

特に何も変わらん。つまんね。

つーかさ、こんな清潔感溢れまくつちやつてるこの保健室の何処

掃除しろってんだろうね。訳が分からん。このまんまにしてたつて別にいいじゃないの。

あー、もうこの際テキトーでいいや。

うーよいしょ、と簾で周りを掃いて、「みを集め、雑巾がけは面倒だからやめた。それらをやり終えるとベッドのシーツのしわを整えて、ダイブした。終わつた。わたし一応やつたもんね……あー眠たい。そりや昨日寝てないんだもの。当たり前だ。つて言つた心なしか貧血になりなりかけてる気がする。

ベッドに腰掛けであーとかうーとか言つてたら、誰かが入つてきた。

「はわ ! あばばばば

そんな奇声を発してベッドから立ち上ると、聞き覚えのあるような懐かしいような声が聞こえた。

「何してんのメイ、文芸部つて夏休み中部活ないよね？」

吹奏楽部で忙しい有嘉であった。

「あばばー、有嘉さんでよかつた。今保健委員の仕事で保健室の掃除に来てて、ちとサボつてたから」「

「あー。そつか。あたしはもう吹部の練習終わつたの。で、メイがここ入つてくるの見えたからさ」

わたしがどんな話をしても大概驚かないのは、有嘉だけだ。聞き慣れたんだろうな、そりやこんな変人を親友にしちゃあな……

わたしがベッドに腰掛けると、有嘉もわたしの隣に腰掛けた。

「で、もうその掃除は終わったの？」

「まあ。てか適当にやつただけだもの、終わつたつて言つていいいんだかどうだか」「

「あはは、メイは自分のやりたい事以外はめんじくさがるもんねー」「

「んな事ないでしょ。日用品や晩飯の買い出しだつて部屋の掃除だつて、高校生にもなつてあんな自堕落なお姉の面倒だつて、やりたくないにしろやつてんじゃないの」

「そーれーは、メイのお父さんもお母さんもいっつも居ないからで

しょ？だからメイがしつかりしてんであって。メイのお姉ちゃんも全然ダメな人みたいだし。あつねえ、さつき瀬川に会ったのにゅいーん。

そんな感じで心臓が飛び出しそうになつた。

「香織くんに？……で、何か言つたの？」

「うん、これ頼まれた」

そう言つて有嘉がわたしに渡したのは、綺麗にラッピングされた紙袋。花柄のその紙袋には、白いリボンまでついてる。手の平に取まらないくらいの、両手で持てる位の。

丁寧にシールをはがして開けると、それはくまのマスコットだつた。茶色くて、首に青いリボンをしている。大きさは……テニスボール2個を縦にしたくらい。

「誕生日おめでとう、だつて」

あ。

今日……8月12日だつて。
わたしの、13歳の誕生日だ。

「『めんねメイ、あたしも買つてたんだけどメイがまさか学校に居ると思わなかつたから、今ここに無いの。夏休み開けたら渡すから！』

「うん、あ……いいの、全然、構わない、けど」

香織くん、わたしの誕生日、覚えててくれたんだ。
茫然としてるわたしに有嘉が笑つて言つた。

「この前ね、瀬川がわざわざあたしの事下駄箱で待つてて、そんで聞いてきたの。”謎の誕生日つていつ？”つて

あまりの嬉しさに、世界が滲んで見えた気がした。

一番屋とはつぴーめーる。

「誕生日おめでとうメイちゃん、ハッピーバースデー！　って意味同じだけど」

あの後、帰宅して暫くすると家のチャイムが鳴つて。扉を開けるとそんな明るい声が聞こえてきた。それは雪花さんで、隣に吉博くんも居た。雪花さんは満面の笑みで、吉博くんはいつもみたいに硬い顔をしていた。

「これ俺から。謎、この文庫の新刊探してたじゃん」

綺麗に包装紙でラッピングされたその本を受け取る。涙が出そうになつた。

「あ、これあたしからもー 夏休みだからこの前家族で東京行つたんだけど、そのお土産も兼ねて」

カラフルなビニール袋を差し出される。それを受け取るとわたしは笑つた。

「ありがとう！　誕生日、覚えててくれたんだね。あーいや嬉しい嬉しい。わたし明日辺り死ぬんじゃなかろうか」

誕生日を祝つてくれる人がいるのは嬉しい。生まれてきた事を祝つてくれるつていうのは、嬉しい事だと思つた。

もう暗くなり、午後6時半。部屋に戻つてプレゼントを開ける。吉博くんから貰つた小説と、雪花さんからは青い綺麗なビーポーチみたいなストラップ、それと　香織くんから貰つた、くまのマスコット。

くまのマスコットをぎゅっと握り締めた。手をぎゅっと握つて、そして笑つた。

嬉しい。香織くんから。バースデープレゼント。

もう死んでもいいつてくらいだつた。だけど死ぬ訳にはいかなかつた。香織くんにありがとうって、言わなきゃ。そうじゃないと、

わたしは死ねない。

『有嘉からもう一いました（^ ^）
バースデープレゼントありがとうー。
すつごい嬉しいよ』』

メールを送つてみた。そんなに重くない、つもりの内容だつたと思う。多分。部活とかで疲れてるだろうから、あんまり連絡しない方がいいと思ってたから。
だけど返信は直ぐに来た。

『気に入つてくれたなんなら俺も嬉しい』

胸が高鳴るのが分かつた。そつけない文面だつた。香織くんらしいな、と思う。

すぐに来た返信にかなり喜びつつ、高速に指を動かす。

『うん！ これからいつもの子といっしょにいる事にするー。
学校でもいつしじょがいいな かわいいから。』

するとまた早い返信。

『なくしても知らねえぞ：』

お前、くま一つで浮かれてんのはいいけど
夏休みの課題終わつてんの？』

うつ。不意を突かれる。実はあと一〇日で夏休み終了なのに課題には手を付けてない。

保健室に入り浸つてるか家でベッドの上で安静かつていうのが多いから、学校の勉強にはついていけない。小学校の頃はいくらくらい

んでも大丈夫だつたけどな。中間はテスト勉強も全くしてない。その割に200人中81位だつたけど。

『全然手つけてないよ…（汗）

香織くんは終わったの？

わたしこのままだと

夏休み明けの抜き打ちテストまずいかも！』

有嘉は確かに頭いいんだった。何でも母さんが教育ママみたいで塾に行つてるとか。香織くんは50位くらいだつたし、雪花さんに至つては学年1位であらせられる。吉博くんは64位だつて。まあ皆ちゃんと授業受けて勉強してんだうづな……わたしより下の友達はあんまいない…。

うぬぬと考えていると、また携帯電話が鳴る。

『そりやお前、中間の結果マジでヘボかつたもんな（笑）

今度は100位の方に到達すんじゃねーの？』

ヘボ……つ…？

ひや、100位……三桁には到達したくないのに…いやでもわたくしが悪いのか。授業受けてないのに勉強全くしないから。

あ、そうだ！

『到達…するかも

香織くん、部活休みの日とかつてある？

もし良ければその何と言つか

勉強教えて頂きたいなーなんて

思つたり思わなかつたり…あはは。』

じやくさに紛れて変な文面のメールを送信してしまつた事を大き

く後悔する。わたしは翌日に送信ボックスを見ながら羞恥心に悶絶する訳なのだが、この時は正気じやなかつた。

だつて、これつて誘つたつて事だよ。
断られたら、とか思つちやうじやん。

せつかくの夏休み、わたしはほとんど外に出られないから。せめて屋内で何かしたいつて思つた。せつかくの夏休み。香織くんと少しでも過ごしたかった。

ちょっとでも香織くんと居たいよ。
窓の外で光つてゐる一番星に祈つた

瞬間に、携帯が鳴つた。

「ひあっ…！？」

一番星を見つめていただけに、少々びっくり。香織くんからの返信だ。緊張して指が震える。メールの受信ボックスを開こうとして、間違えて新規作成ページにとんでしまつ。気を取り直して受信ボックスに辿り着き　　彼からのメール、返事は。

《別いいけど

来週の土曜で部活休みだから
1時にお前の家行くから
そんديいいか？》

「……いやつた　　つ！」

思わずその場で飛び跳ねた、一番星の光る夜だった。

少年Xの誕生日コンペ。（前編）

誰々と過ごす誕生日を心から楽しむ。

少年×の脳内ワリリンクス。

病弱って事からは全く想像できないけど、謎は夏生まれだつた。

彼女の誕生日を教えてくれた謎の親友である櫻井は、陽気に笑つて言つた。

「ほんとだよね。あの性格で容姿で雰囲氣で、8月1~2日生まれとか有り得ないよー。メイは冬だよ！ 病弱で、いつも冬用の分厚いパジャマ着て、熱冷まシートおでこに貼つて、あの綺麗な黒髪ぼさぼさにして、真っ赤な顔で寝込んでる。部屋のベッドで。ほんと冬っぽい」

確かにそうだ。櫻井は謎の事をよく知つているんだ、と思つた。
ファンシー・ショップは恥ずかしくて入れなかつた。商店街の男でも入れそうな雑貨屋で、女の子が欲しがりそうなものを部活帰りに眺めていた、8月2日。謎の誕生日の10日前の事だつた。

俺が謎の誕生日に何かあげたら、おかしいかな……

そんな感じで悩んでると、部活でミスをした。俺つてバカだな……謎の誕生日の前日、11日の事だつた。

「北守中の部活の顧問の中で1番鬼だろ」と部員全員が口を揃えて言う位のかなりスバルタで厳しい陸上部顧問である、平塚先生は俺がミスつたと同時に飛んできて、激を飛ばした。

「テメエ何抜かしてんだボケ、夏休み開けには選抜メンバー決まんだぞ！」

「…………すみませ「瀬川、お前何考えてたんだ」…………は？」

「ボケつとしてたんならテメー何が余計な事考えてやがったんだろが」

「いや、あの……」

「色恋沙汰か」

「はー!? いや違うまつ 「反応早えってことはそなんだな、おめえ部活もろくにできねえ癖して恋愛沙汰なんて早えぞ!! いいか!？」

顧問平塚をここまで恨んだ日は無かったと思つ。怖いってだけで実際通常時は普通に面白い人だつたから。だが俺は部活仲間の前で”恋愛沙汰”発言をされた事にかなり恥を覚えたので、平塚先生をキレさせて体育館を追放された事は幸いだつた。頭冷やしてこい！と言われたものの何をすればいいか分からないので、適当にジャージ姿で汗だくのまま階段にドカツとふてくされて座つていると、後ろから声がした。

「何してんの瀬川つ、陸部体育館で自主トレじやないの?」

謎と違つて甘つたるい、高い声だつた。数日前に話した櫻井だつた。

「……体育館追放された」

「なんでー?」

「ボーッとしてたらミスつて平塚がキレた」

「へえー、メイのこと考えてたんでしょ」「はー?」

いち早く俺が反応すると、階段の踊り場上から櫻井はけらけら笑つた。「分かりやす過ぎー！ 濑川おもしろつ」

……図星ん時は反応しちゃいけないんだった。平塚に言われた時点で学習すべきだつた。

「どいつもこいつも何なんだよ、くそ……」

「メイの誕生日、プレゼントあげてよ?」

櫻井がまた笑つた。よく笑う奴だと思つた。謎とは大違ひだ。

「あの娘つて友達あんま作んないから、小さな事ですつごい喜ぶの。ちっちゃい子みたいに」

メイつて基本は大人っぽいんだけどね、と言うと櫻井は、また階段を駆け上がりつて行つた。吹奏楽部の練習だろつ。謎とは違う、明るい天真爛漫な少女。謎が陰なら櫻井は陽だ。あいつは何もかも謎

とは正反対。そんな凸凹な2人だからこそ、親友になつたんだろうが。

その日の帰り、また例の雑貨屋に行つてみた。この前見てたコーナー……あつた。マスコットの「コーナー」だ。女子がよく鞄にジャラジャラつけるのをよく見る。正直ああいうのは嫌いだ、派手すぎだし。謎はスクールバッグの持ち手に青いリボンを結んでいるだけだった。少しシンプルな方が俺は好き。

そのマスコットの中に1つ、ピンとくるものを見つけた。焦げ茶色の熊で、マスコットにしては大きくぬいぐるみに近いが、ぬいぐるみにしては小さい。その熊の顔が少し謎に似ている、と思つた。ぼーっとして何を考えているか分からぬ、不思議な雰囲気も持つた表情。そんな謎に似ているマスコット。青いリボンが首についていた。

恥ずかしさを押し殺し、レジでラッピングしてもらつて店を出た。それを鞄に入れると、足早に家に向かつた。

翌日。彼女の誕生日だった。けたたましい音を出す目覚まし時計は、いつも通り7時ぴったりに鳴つた。それを止めて適当に身支度を済ませる。学校指定ではない黒と青のジャージを着て、スポーツバッグを持って家を出た。タオルやドリンクや運動靴に弁当。その中に、ラッピングされたそれも入れて行つた。玄関でそれを弟の水鳥に見られた。それは何だ、誰にあげるの、まさか女の子? もしかして彼女 10歳の癖にやけに耳年増だなオイと思いながら、「うつせえ」と言つたけど、顔が不覚にも赤くなつていたので迫力も威厳もなく、水鳥を黙らせるには足りなかつた。色々と。

文芸部である謎が、何故かその日に学校に来ていた事は知つていった。4組の下駄箱に、小さな白いリボンのついてる変わつたローファーが置いてあつたから。けど勿論直接渡す勇気なんてこれっぽつ

ちも無くて。部活の休憩時間に櫻井を捕まえて、「あいつに渡して」ってだけ言って逃げた。それ以上は恥ずかしくて身が持たなくて、練習に戻ると恥ずかしさとか期待とか不安とか、色々な感情を搔き消したいが為に自主トレに打ち込んだ。

ミスもないまま部活は5時に終わった。その後に友達とかとふざけて体育館で適当なバカみてーな遊びをしていると、顧問に怒られてまた筋トレが始まった。畜生…

その後は皆、有無言わずに帰った。俺は落ち着かずに皆が帰った後も、校舎内をうろうろしてた。ほとぼりが冷めて、下駄箱で靴を履き替える。“1412”と生徒番号が書かれた下駄箱の中は、もうローファーはなくなっていた。何だか切ない気持ちになる。

すると鞄の中で携帯が鳴った。このメロディは謎からのメールだ。胸が大きくどきん、と鳴った気がした。携帯を開くと、嬉しそうな彼女の文面が目に飛び込んできた。

気に入ってくれたんだな
そして喜んでいた。
思わず笑った。俺は安心した。

すこし顔が熱くなつた。返信して外に出ると、辺りがもう暗くなつていた。7時を過ぎていた。

冷えた汗を拭う。夏の風の匂いがした。

全身で恋する女の子

「あああああああありかあああああああ～！！！」

メイの誕生日の翌日。あたしが部活を終えて、友達と帰ろうとして下駄箱にいたらメイが後ろからあたしの背中を勢いよく押した。声だけでメイだと分かったから、あたしは振り返る前に叫んだ。

「何なのメイ！ 变な声出して、も～！」

振り返ると、めちゃくちゃ赤い顔してるメイがそこに居て。メイの事を明らかに「怪しい…」的な目で見つめる友達を先に帰して自分の鞄を下駄箱に置き、取り敢えず1年4組 メイの教室に入つて、座つて話を始める。

「で、どしたの？」

聞くと、メイは真っ赤な顔で「うう～…」と机に突つ伏した後、ぼそぼそと語り始めた。

「昨日ね、香織くんとメールしてたらね～…、ら、来週の土曜日、わたしの部屋で勉強教えてくれるって……ふたりきりで」「ええ～つ～？ マツジつでつ～？ つきやー…ふたりつきりだつて！ いいなあ～！」

「そんな大きな声で言わなくともいいじゃん……」

メイの目から、女の子のピンクのオーラが出来るのが見える気がした。メイはあたしと出会った時からポーカーフェイス。だけど最近、喜怒哀楽が前より激しくなった。まあでも普通の女の子よりはまだまだポーカーフェイスなんだけど……

きつと、瀬川のせいだ

そう思った。

だつてあたしたち、乙女つてそういうものだもんね。

「瀬川の私服姿見るチャンスじゃない？ あいつ無駄に脚長いしスタイルいいからさ、絶対ジーンズ似合つと思つんだよね～、しかも

イケメンだし」

「あ、有嘉……無駄について何なの、無駄について」

「別にー。 つていうかメイはどうすんの？ 土曜日つて言つたらあと4日じやん！ 服買わないの〜？」

「実は買いました」

メイがふざけてワインクとピースをした。 こいつ無駄にワインクうまいな。

「青いリボンついた白いワンピースなんだけど……半袖で、袖ふとこにレースついてるの」

「え〜つマジで？ メイ絶対似合つー。 メイの顔つて清楚な感じするから、白ワンピ合つよ」

「そう？ ありがと〜…。」

あの瀬川がねえ。 メイに優しいのか。

メイは変わった、と改めて感じた。

メイはいつで病弱で意味不明で、綺麗な女子。 しかめつ面のポーカーフェイスは何を考へてるか分からぬ。 あたしはこの娘と親友になつて5年経つけど、未だにメイがどんな事を思つて感じてるのかなんてわかんない。 まあそれでも行動パターンとか言つてる事とかはまだ分かるけど。 メイの珍行動に驚かないのはきつとあたしだけ。 学年の7割くらいの女子と普通に話せる位のあたしと、恐らく気軽に話せる女子は1割にも満たないであろう正反対のあたし達。 あたしは廊下歩いててもよく声掛けられる感じで友達が多い。 で、メイはと言えばあたしが誰と話そーが、その隣で黙つて無表情を貫くから誰もメイに話しかけない。 曰く女子の高い騒ぎ声が大嫌いらしい。 全く別の意味で目立つあたし達が一緒にいると、何だか空気が異質になる。

メイは名前通り謎が多いし。 あんま見せたりしないけど、左腕にいつも巻いてる真っ白い包帯とかね。 あれを見るのに瀬川が何

も聞いてこないのは遠慮してんのかな。そちらへんの女の子達はメイに話しかけられない分、あたしに聞いてくるけど。

「あの娘、何でいつも腕に包帯巻いてるの」って。

大好きな親友の秘密だもん、
教えてあげたりなんかしないけどね。

だけどね瀬川、あんたにならメイのどんな事でも教えてあげたつていいよ。

メイをおぶつて家まで送つてくれて、助けてくれて、心配してくれて気遣つてくれて。どー見たつてそんな雰囲気なのに、もどかしいつての。

あんたの胸ん中、きつとメイを思つ気持ちでいつぱいなんだよね。

「ねえ、メイ」

「何、有嘉」

「よかつたね、誰よりメイを大事にしてくれる人がすぐ近くに現れて」

そう言つたあたしを見て、メイは笑つた。

「それって有嘉の事? そりゃ有嘉はわたしの親友だもの
あたしはメイの脚を軽く蹴つた。

「ちよ、何よ有嘉さん」

「メイの鈍感ー。知らないよつー」

そう言わされて笑つたメイは、きつとすゞぐ綺麗だった。

全身で恋する女の子（後書き）

メイの左腕には常時包帯が巻かれている事が判明。

疼く心と現実逃避

謎からメールがあつて、俺は顔には出さないものの、頭の中はかなり有頂天だつた。

『到達…するかも

香織くん、部活休みの日とかつてある?
もし良ければその何と言うか
勉強教えて頂きたいなーなんて
思つたり思わなかつたり…あはは。』

そんな変な文面で送られてきたメールは、夏休み明けのテストの話をした時。これはお誘いというやつか。俺は瞬時に夏休みの部活予定表を鞄の中から出した。今日は12日。明日から土日は遠征があるから無理だけど、来週の土日は開いてる。で、日曜は水鳥の遊びに付き合つてやるつづつたから、土曜か。

俺よりも謎は成績が悪い。

小学校の頃は謎の成績は飛び抜けて優秀で、学年トップにも到達していた。この頃から学校は休む、出席しても保健室に入り浸りで授業はあまり受けていなかつた。それでも謎の理解力は教師も褒める程のものだつたから、大抵保健室から戻ってきた後に黒板に書いてある事を見れば内容は理解できたらしい。小学校の勉強は持ち前の理解力で済ませてたのだが、中学校はそうもいかないらしい。それでガタ落ちしたと。まあそれでも200人中81位つていう中の中を保てんのもすげーわ。俺が謎みたいに学校休みまくつてたらあつという間に150位以降に到達だ。まあそれも謎の頭脳は半端無かつたつて事か。

まあ、あいつのよく分かんない構造の頭脳はさておき。

高鳴る胸をどうにか制御しつつ、来週の土曜に謎の家で勉強会をする事にした。時間は10時から。少し早い時間を設定してきたのを見ると、どうやら長期戦に及びそうな位の深刻さが伝わってくる。課題の山に苛まれてる謎を想像して、俺は思わず帰り道で笑った。

いけないな、明日は遠征だ。謎の事を考へんのは来週からでいい。今は部活に集中しないと顧問にしばかれる……俺は早歩きで、心配性な母親と可愛い弟の待つ家に帰る事にした。

「よつ瀬川！ おはよー。隣座つていーか？」

午前8時、北守中校門前。大型バスが1台停車している。明るくなつてきている太陽を背に遠征に向かうバスに乗ろうとする中学校に入つて仲良くなつた、同じクラスの仁科瞬^{にじなしづゆめ}也に声を掛けられた。

「……別にいいけど」

俺は朝に弱い。今日は6時起きだつたから、テンションが低い。2人用の隣同士になつた座席が、通路を挟んで一列ある。俺は仁科に窓際を譲つてもらつた。情けない事に遠出となると酔うのがいつもパターンだ。荷物を積んで、手ぶらで座席に向かう。座つて暫くすると、バスは発車した。いつもの見慣れた学校周辺の景色が、少しずつ遠くなる。

「1年は遠征初めてだよなあー。楽しみじゃね？」

仁科はよく笑う奴だ。そこだけなら櫻井とよく似ている。男女関係無しに人気な所とか。ただ少し無神経だけどな。短く切り揃えた髪は清潔感があると思うし、俺みたいに身長も高過ぎない。顔立ちもまあ整つてんだろ。うん。

「遠征つづつたつて初日は自主練が多そつだ」

「ははつ、かもな！ それでもいんじやね？ 環境が違うだけで随

分刺激になるぜ」

「……刺激ねえ」

「そういうやあさ、瀬川って彼女いる？」

目が点になつた。唐突過ぎて話が読めない。

「はつ？ 居ねえよ。いきなり何だ」

「いや、噂聞いたから……ホントかな、と」

噂だあ？ 何だそれ、俺は聞いてない。バスの中の陸上部員の話し声や笑い声で、この話が搔き消されている事に安堵しつつ、俺は声を少し抑えた。

「誰に聞いたんだそれ」

「色んな人から絶えず聞くわ、お前の彼女説。女子も話してるし男子だつて知ってる」

「マジかよ……知らねえぞ、んなの」

「そうなの？ ヘーえ、俺は気になつてたけどな。霧島謎が瀬川の彼女だつて聞いたから」

「何故その名前が出てくる……！」

条件反射というやつか。キリシマメイつて単語を聞いただけで胸の辺りがどきん、と反応した。俺の彼女が謎？ 違つだろ、それ……。仁科は俺の反応を見て、豪快に笑つた。

「ははははつ、瀬川つておもしれーのな。だつてお前ら仲良くなれるしさ。にしてもさー、霧島つてなんか存在が謎だよな

「……何で？」

「いや、何かさ。初めて見た時に、なんかうおつ！ つて来た。綺麗な顔してんだけど、なんか強そうな顔してんだ、あいつつて。何もかも耐えられそうな。で、なのに病弱だから。4組と5組つて体育合図だろ？ いつも見学じゃん。霧島」

「……ああ

……。うん、言われてみれば、そんな気がする」
それは俺も思つてた。謎はそこの女子みたいに意志の弱い、流されそうな奴じやなかつた。少女らしさのあまりない精悍な顔つき

をしていた。

うーん、謎なぞが深まる。

「あいつってやっぱ訳分かんねえ……」

つづーか、遠征中に謎の事考えたらダメじやん。

疼く胸に気付かないふりをして、俺は目を閉じた。

疼く心と現実逃避（後書き）

心配性な母親と可愛い弟が待つ家……とあります。香織くんの家は別に母子家庭じゃないです。

香織くんが帰るくらいの時間に、お父さんはまだ帰ってきて家にいないだけ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1695s/>

保健室の眠り姫

2011年11月6日12時49分発行